

正訂
蒼名枕翁白集
下

正訂
蒼名枕翁白集
下

中村俊定文庫
文庫 18
872





蒼虬菴發句集



秋之部

おも尾をきりゆくときをてはるの秋
 吸かしの乃年らむさくをねれ秋
 山の井れ花の候はりけ所の候
 人たより田井まゝあてはをれ秋

もやうくそ藤川そそ秋の味
何れうと市子実りやらきれお死
とのそぬ柱年ようそ今初の味
くそいそ起て所とれは北方の秋
江の味より極年未うけさ秋
と秋味よもるは加歳未ては秋
々秋の秋まのうらみさる字は秋
けさのゆまつくもふ度る境のま

子度

うらみと起てるは秋の味
来る秋也志こき隣中川心
一二寸清水もあそてはさの味
と秋の涼しれとそ灯も是等
秋まや堪悪のれる尾乃あり
あだのうらみさるは氷のそ
たの秋もすもと服年入る鐘の巻

この秋も秋の夜更けを起て口をきき
初あまのたもと火の海に霞の下
を所縁やよこし市々を記摺火お
初秋の洗ふて立ち竹」 第

この秋の夜更けの江よき

任吉の秋の夜更け出る小舟は
稲妻より翌の水汲伏家か
いなりのまやより秋の夜のたゆ

草分けくま子稲妻の小舟より那
いなりのまやも葉体も一宵の夜
影の初也花のゆとり秋の夜
市巾の初世舞のふり川より
あまの月や境を志す秋の宵の水
舞を志すふりも瀬田の夜
秋の初也花のゆとり秋の夜
影の初也花のゆとり秋の夜

新白やそわよの世を花の根
桐一葉うらも表も青の里し
おとろ麻の油扇平並級一葉分
握はくをくれてやうより庭すじし
梶一葉持てはるや藤也一き
七夕を際へ清はつく時ちくれ
七夕や出り詠るワか垣根
たぢははる哉思ひて居るは後一ち

跡思を清くむくやうにたう
付ひ加茂川境をのちるり
いぢのよのけりすやうなれ
七夕や秋千めてたは此きや一紀
昔おちのやうよて早うの道と表か
加茂川の上平部のははれ川
ふるはとれ東はまち一銀は
居くれとんあすものそ萩の志

石垣のほめ紙をまけて花のあ
まふと花をえりて花の花
咲ともくは花ハ日かけふ花や花
枝うは青をを花む花んは
まはき一花をう花のさかりう
おまき花の聖やう花は花と花
けり人の彩きす花の垣花
との花は日やちまくと花のま

やうくと花をうけ、山の花
花のくは花よ花れて花のま
と花をのまは花のま花のま
花の中は花を花は花は花
この花は、花より花のひと花
花は花は花は花は花は花
花は花は花は花は花は花
花は花は花は花は花は花
花は花は花は花は花は花

雲の下の杉標すむく萩のさ
 づの萩よそくくくくくくく
 萩のく急早くくかかかか
 飛込く鶴の指さぬすく
 又す知くぬ指くくくく
 もすく紙聖のゆりれを
 雲のくくくくくくく
 山中くくくくくくく

山伏の標すく志つあるすく
 水おくの峯くくくくく
 雲の穴空くくくくく
 いと霧くくくくくく
 のむくくくくくく
 雲のくくくくくく
 雲のくくくくくく
 雲のくくくくくく

他人の使つをそとなくまゝに流され

梅屋のあやうきをかくりて

ふりもやまゝも徳も出て
西の影の照る面もや秋まゝの
くれぬとも秋の宿の秋 為
をたつて大を焚きつるのやとらふ

いづくの宮もまゝの句

とてをてゑをまゝにたゞいづくも

そとにたつ秋のり 流る大を井

去のまゝも神まゝははるはの上

えとつららの月けいあり 金の月

大文字もまゝめまをたゞとらむを

炊籠や物をえんのすゝ竹の葉

まゝもあの中へまゝにや踊りな

月けいもつ時をたてあるまゝも

お梅をてゝと東海へ 炊籠

市一積ぐ隣へやると表むき
刈一積年浮けり佐母のたけり
吉はらるるのころは懐く
まゝに結る暑を肩や日笠山
おくやあのお海へは寄くたぬ
小夜礎そあつた山も
重足へちあつた

總念年とあつてくや一山表礎

人伝りのくまづま一山の
お稲のまやむく起りて遠歩り
又せれ香や水おてあつた床
晴てりぬや隣の稲乃く
大支けお雁もあつた稲の
ぬくもの尾上をれきて秋の
をちて花の香と集りて秋の
日くどくこの山もあつた

虫いりく 州のうらを 字を
隣にまゝ 夜とく ぬらう けりく
り せり けり あり 際 出 せり けり けり
庭 掃り 掃り 育く けり けり
土 居の 灯の けり ぬら 偶 けり けり
六 月 けり けり 月 けり けり けり
去り けり けり けり けり けり けり
あ けり けり けり けり けり けり けり

時

竹 けり けり 竹の中 けり けり 秋の けり けり
境 けり けり けり けり けり けり けり
秋の けり けり けり けり けり けり けり
親 けり けり けり けり けり けり けり
けり けり けり けり けり けり けり
あ けり けり けり けり けり けり けり
今 けり けり けり けり けり けり けり
梳の けり けり けり けり けり けり けり

下

砂のくしと千原を吹く秋の風
 眞さけりて雲村恒報をめぐりしり
 新の浪やまのり新市の口吹くき
 糸やあしらの時松村とらりる
 茶店をいしとひて

新の浪やまのり新市の口吹くき
 そののまは小舞の少家唐舞じ
 草むらや千原を吹く秋の風

一日のおくはききし秋のそよ
 石山千公のちりやはまのそよ
 所はくも横をうきる秋乃山
 夕陽をいしとひて新市の口吹くき
 糸やあしらの時松村とらりる
 草むらや千原を吹く秋の風
 海舟の松葉はちりてまはる

秋

秋の空よりわたる月日ゆく天は福
をもちんあちと年暮らばうや田の鴨
くしの鴨おの海をしの世も持た
世をよみ秋よりつれは海よりる

法

草中も木もこれ人聲よま火の束
三日月々土おちりきかしのなき

枯木屋の本の影おく也三日の月
撮先人のぬれこやうけう三日月
一とやの急をいんえり社のお
松う勢いぬる秋を秋の月
去つこのちるものを危めて燦の月
あつていけりあつていけり秋の月
あつていけりあつていけり秋の月
あつていけりあつていけり秋の月
あつていけりあつていけり秋の月

新山を流平に出ぬけて秋の月

とのけいなるをくくすの月

雲の敷は保のともくまき

系年出て

竹一葉ふくまはるる也りよの月

月々宵明りけり熱なるうらり

ろふふ八風の吹くきかこを

名月之摺たを厚き松乃のけ

名月之、一葉凍山平住るる

明月結けりぬる也人の裾

名もくやなるのうらみのるる斗

年々の名月ありたはぬれ

名月之梅の立枝もえり

名月の傍り文もく氷るる夜

名月之竹煙るる谷の家

名もくや物なるくく地持の田

炭石んと馬子やすすも月見は
さむしーろのをしは鎖おく月見は
所はさつおまそ地月見は
出ーほ見そ心落つく月見は
落残る土揚のくの月見は
茶籠ーたあそ畑のほきまを
松葉かく胃七月のゆー乳
物ーくそ首骨たさー月の雪

押ぬくひくー水月あふり
降ーけいさすうそ月見は
人そ通そゆき雪出さる月の
茶籠ーゆきをたのそそ澳たの月
思案ーそと所れ入りぬ月の

堅田より

月代やもく人あそゆき雪
八月十五おまそ首と茶籠は

を予も急ぐ

月の影あちらや 何年一葉のれま
十の月の影をのせしう原花舟
いさよひのまきのふのたけ裏通り
十の月の影をのせしう原花舟
お海を渡る火を限りあるおきり
牛車とのちをくせしう夜を
草一葉はくき紙をのちのちあか

ころの草をのせしう原花舟
ついで利いあまのたけき新原舟
秋の種れ哉とくろまも夕日丸
草一葉はくき紙をのちのちあか
鳴子も秋いあまのたけき新原舟
夕山をのせしう原花舟
江を渡る火を限りあるおきり
日のきしう原花舟も谷の麻

字の戸付外に心は秋の夜
眼は前より多うもをりて秋の雨
あゝ恨ましますりの心はゆきのふ
葉の目々ゆは獄鳥の出て啼
り海に暮るるもよりの心は
夕りけとあやや一不葉れも
任吉の松も暮るるもよりの心
まゝの心はよりの心はこれ

山守の心はよりの心はこれ
垣あゝは世もや葉は皆赤き
畑葉のあや垣根の心はこれ
あはれ同一根分の葉乃をれ
まゝの心はよりの心はこれ
なまぬくよは雨桶の上や葉のま
まの心は古風てよはを菊の若
ふまゝの心はよりの心はこれ

つ

下五

のちや地のみ水くものす
わらう人くまをいし

さほくく平受くく菊の自然く
陽理炊もくくく講きくの花
娘川之原き人所くをくく
立山千かきいをく秋の色

伊勢路記行

きちの徳とすす石於山

陰者ゆくくまあいさ此焼栗
を串のくくくくくくくく
あけれ

く一葉の古くくゆむ筑紫山
棟木の強とくく此神社あり
もろくくくくくくくく

只大乳系棟の本のくくはれは
棟市之あくくくくくく

つ

下巻

老りまゝを月を海にまゐる
を乙午悔ける午あつてを
ふま官をねむる

あふの公人午惜む神詠山
うたのたもたれぬ二見の秋事人
かたこと年一電もたつたおの山
白る雫のゆゑに庚申
の交りつづの字序をむすひ

とみ下十境をいつち定めつ
あををうつゝ拾薪庵の居る
い道なを候するあをを意はる
あををうつゝ秋色物よもあつ
あををうつゝ秋色物よもあつ
あををうつゝ秋色物よもあつ
あををうつゝ秋色物よもあつ
甲午の秋を武午うつゝあを

人くみおろきて

新日さらりとあつて体りと海に

華の秋ハッ掃きて

花の時来てアヒ虫さむ杜若

くまらぬ秋もあけり之上山

空都の山にて

くもひて旅人あつて秋の露

山はくろあつて此のゆまのそら

秋たてるとむらゝ人の秋の露

一歩とを日におきて秋の露

庭をけい掃布と併あけの露

ふ破りて

ゆめりとアヒおろす不彼の秋

呉山の宝晋書を居侍りて

先年秋後に杖をふりてこの露と

はげ後年あつて秋の露と

つ

秋

食を接の此を何をもへた
むやとやそをさしたの昔を
うれくううと極平集置打打
たさいと喜あう極あれの所
るれく沖あれに極あ人もあし
とと背討ひ来るくくみあて
物くくえ狂むくくや鹿の狂

甲申の秋九月徳学院へ

所幸乃乃乃を加茂河の舟より
くく極く極く

所幸海へ松風秋をくすく
一まあつちあつち出さう後の月
かたまぬ枚の木ままのちれ有
上東くけりやと晴ぬ后乃つき
ふく年狂く極く此谷のももあふ
畑くらおりの少もの紅無りあ

とくし海と本館屋のくしの記多事

眞屋より

りみま香々々れれれの中一の流
わく結と雀の歩り子大の中

冬之部

十月之海とふまに松葉路

十月之や子路りよ 赤 楳

くれりては障子の色も津島月

あつらひのよや妻の雑木山

つ

下三

藪あ掃へて原をたつるさうさ

松坂のあさりの紀の志願す

五つけ鶴のあさるすけれ

日も水山やこそ北の稲子雀

羽をさあさす梢のささや六月

時とと露の露岸よりゆけし神はれ

さうされりふ沙電も岸煙り

障り子りりお葉のここのまのれ

さうされりさうされり波はる

草や雨の隠のたふぬれをゆれ

稲垣のふらふらとさうされり

あさるすけれ水のふらふらと

一と聲ハ鶴もさうされり

あさるすけれおけを河時局

あさるすけれあさるすけれ

ひと岬とさうされり

一志くます居す常や山の雉子
 拙りやのりやうけあやうれ終
 名業の跡を甲斐ある志くれり
 志くまや流す細お川むら
 時ふるやもえくくろ芥の乾
 しるまれば出るさみして五位の巻
 捨常もあてまはれは片方ひき
 下系と志くまはるよ塔はる

芥の香とく知てそものひまか
 泉涌きを顔てをくもる時ぬれ
 志くまや一隅くはく池の水
 まね板の音時めさうひれり
 揚らぬる板の振ふ志くまり

二見よき二句

此と歌の時ふれ色も振らたし
 水さうのうとくんそんのかくれ

佳景をいんえい人を息ふ時日
この其その人平あり

夕山之影を平野に望む時毎を

春比也

砂渚一時毎をりる所を記

展をてつりて物毎を志あり

とせよ時毎を平野東山

南東塚平をりて三湖をてり

むすむ江渚に竹をよつたり

形は並松の梢平のりて山

渚をたるむ平野教村の炊煙を

及てて平野渚に眼をてり

岩の砂を水渚平のりて

さきや其の久く物ををりて

中平

あつりの江渚平のりて物あり

霜よ年々くちのくり物の昔
を思ひ出して

米山のふる道ゆつむさくしれ

霜よ

月時返らるるを庭の倉式くれ
りや身の氷と来ら之時返の極
赤らその志ふをほめるを式は
掃よせよ木の葉の場とら思

赤ら式倉の十友の種の色
あ仙やまの昔年のまの草
木急し秋を来るをさるぬの日
そのたぬ月や枯れをてら斗
ゆらうと流氷橋の上の本のま

旧津の霜よ

安徳のまの木の葉のまの
冬仲ちよ

けと志をれ擲をせめくるも人んを斗

翁の日坂を千ゆりて

翁の付木の打りともれたるは此海

去年の翁志とて本毎書を千念

今更なるを千念をとりて

十をのやと拂も樹年おく念式は

舟つるやとは常系あつる十お念

念すもたれや木の葉れあつる念

をくくと株の誇ええそ念木の念

志と種ち千ゆりる月根たこの葉

次くこの木の葉なりこの念ゆれ

くくこの念るを念

木のすらと念千出して念木の念

お中念念を念えして念

念のむろを念

念千さくゆり念念念念念

山々の峰々を渡る鳥の行
あふむきをけりきりたるおちを
霧の来てくづくそのゆるるる
木の上より水は流るる
風の日をけりきりたるおちを
あふむきをけりきりたるおちを
風は松の末より吹く

敦のついで

山のついで
あふむきをけりきりたるおちを
霧の来てくづくそのゆるるる
木の上より水は流るる
風の日をけりきりたるおちを
あふむきをけりきりたるおちを
風は松の末より吹く
大振川志
大振川志
大振川志
大振川志
大振川志
大振川志

時め以てある也 栴檀の根を
 しれ あり脊中のぬえ栴檀の
 石際のみちて日の入る所の
 折の節にささくもなる也 栴檀の
 石に石を砕くらんよわくうも
 折の石も一寸ち出まると
 石の石

石の石の中にも石の石
 石の石 石ををれきて
 若くして浮世ををる 庵の
 いと林様ををる 冬木立
 小妻の石をれ 冬木立
 ををる 冬木立
 ををる 冬木立
 ををる 冬木立
 ををる 冬木立
 ををる 冬木立
 ををる 冬木立

幸し若草を搦て来りては禁のぬき
 きりくくぬきぬきぬきぬきぬき
 影のきりぬきぬきぬきぬきぬき
 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
 ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき

公米の寝殿を下に持たせしむる

予ののりき恒振のそよ風のぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

水ゆぐらぬきのすまひ日のぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

山素花を搦てきくし草下枕

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

ぬきの若草ぬきぬきぬきぬき

こゝにて

あなをよもとのいひ顔の布替の海
朝くまかそく。池乃小鴨を
夕雲のてらと之敷振の片とつ照
汲水の波ををけりや鴨を
泣鴨は急をそく。日和
す。鴨や日くれさゝみの時のそく
河辺のそく。出て来て。毎ふ小鴨を

新川よひ。一。鴨の足
あす。の心つらむ。成る。松
あ。海や別。子。の。松。の。松。
松の。子。松。松。松。松。
西。子。松。松。松。松。松。
あ。松。松。松。松。松。松。
川。松。松。松。松。松。松。
き。松。松。松。松。松。松。

時を平一今月かて指巻に乳手なる
 あら後之永良是河と平常たれと
 多立少んで常河一縁のちとられ
 常一と此へええす成はし州あも
 片と走りりてさう船の縁、
 ひやうのききあなるのまら岬、のま
 三月の戻りて

あくゆけのも海にされり丸潮

ちと一長来り大福忘り地り
 ぬさるもの思ふはしとて
 志のち八月花よと人の
 ねつりて

夢を平一んてあを春受の海りか
 夢又つて此屋振りりうとれきお
 浩穽は日と何処平居て行路
 細紋書タラれい子もある男

つ

五三十一

とくくくく旭平ゆき網代
網代中うううの歌へむとらり
隙搦た取うう来ぬけり網代
戸口から芦の浪もやあつた月
は家も人の居るれうふ月
上加茂くふとあつたききふ
りあつたううあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

ううううううあつたあつた
里の灯もあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

白子の子安堂り請し

あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつた

あつと日の出る山を越れば海の雪
をけ道をもりあるる之雪け山
鳥出まひ鳥出す雪の隣りれ
芦千舟雪よらんもれ掛ひり
何となく明るさこのひ也雪のう
やあやそ一校ちりぬればれ雪
雪を舟廿百かよぬ姿この年
由流をくぬ田千りる松の歌

松明雪よそ出まされぬ雪の歌
雪の脈を休むる麦の堅田くれ
と流氷も持て来るる之雪乃里
大雪とぬらうは流氷を鶴のう
木つつきの一雪かある木けり
雪をいよふり先い歩草ち
月子とええ二日月ぬ雪 佛
以て素て袖千舟り竹の雪

〇

下三十一

接テリ

障一にぬ雪をて明るのありけ

昨鷲身雪見

おく障をい雪ののり一庭の松

越后妙法寺にて

垣根うとんると此雪の目くれが

気比溪眺雪

大雪の障とふんを千浦のきぬ

西風の冬ふくひ吉竹を物え

細呂木の心算をさあつとえ

雪あたる之ゆをさそとら小田の橋

又る日よう雪の形ひとと附け海

ましか今や抱く千流る岸うれ

相の美れあをまそあけり厚さ

五ふ百もぬや雪の細乃魚

控の末れをう年春何ゆとれ外

雪月之ゆりともきうぬほくのき
雪月の如き年もはとの小窓に
雪くもやら折れたゆとありきと梅
あすの春は月も明らんとあけ梅
あはれのまはれは雪もぬとけ
後計やくと雪梅の月には
遠はりのゆとく雪梅ゆき
うき雪梅けきと出さる梅

折る雪の音は折れたる
すく掃くをくして枯ぬ地の雪
田の中は雪子つく折りて年の雪
雪は雪といと息つくや雪のそれ
雪は雪を雪の山とく
雪きく

折る年の雪は折くも雪の山
大年之風情の出来る日雪方

おとすまを灯で見る 漆木の板に

雑之部

楊子や房子又珠もさかへる
階はくちる氣はさかんすふ二行
あーさかへるぬまの板にふこの山

追か

何ぞれ五月の雨に
後地り對一七段
ををらる故人を
ふあーとんさかへる
子やほえ侍りて

何れ末七朝の八段の梅のむ

若人此の約句条被

也——色量の為人丸柱の家の
無き事出たる——うきわらひの
若人此の約句条被
若人此の約句条被
若人此の約句条被
若人此の約句条被

夜

夜

菅屋庵奇淵宗匠撰

芭蕉袖草紙

横本 全三冊

この時代の芭蕉八紙の第一巻に記す「芭蕉の袖草紙」といふ書名は先哲の吟詠を影射して芭蕉屋の海老原の撰と稱すに非ざるべし

麦慰舎梅通詞宗随筆

宮利風集 全

麦畑集 中本三冊

是ハ梅通の吟詠所ナリ梅通の
あまのこゝろをこゝろとて集め
これに梅通の風集と名づけし
文のみの吟詠も亦下りて候あり

梅通空羽綴句集

蕉門 俳諧
夜半草 蕉村翁遺稿
附合子 芭蕉の曼

門人高井几童翁校定

師を求めし〜自らの芭蕉の所合
なるの芭蕉とて吟詠のそとに於
先哲の句と芭蕉の句とをてを
あ〜むゆふあ〜あ〜の号りて
一際〜を極まめ〜を極め〜

蒼乳空羽綴句集

同 俳諧集

各全本 武券

江戸日本橋壱町目

須原屋茂兵衛

紀州若山新通二丁目

帯屋伊兵衛

書

大坂心齋橋筋博労町角

河内屋茂兵衛

同 同筋本町角

河内屋藤兵衛

京都寺町通五条上町

山城屋佐兵衛

同 二条通坂町西町

林 芳兵衛

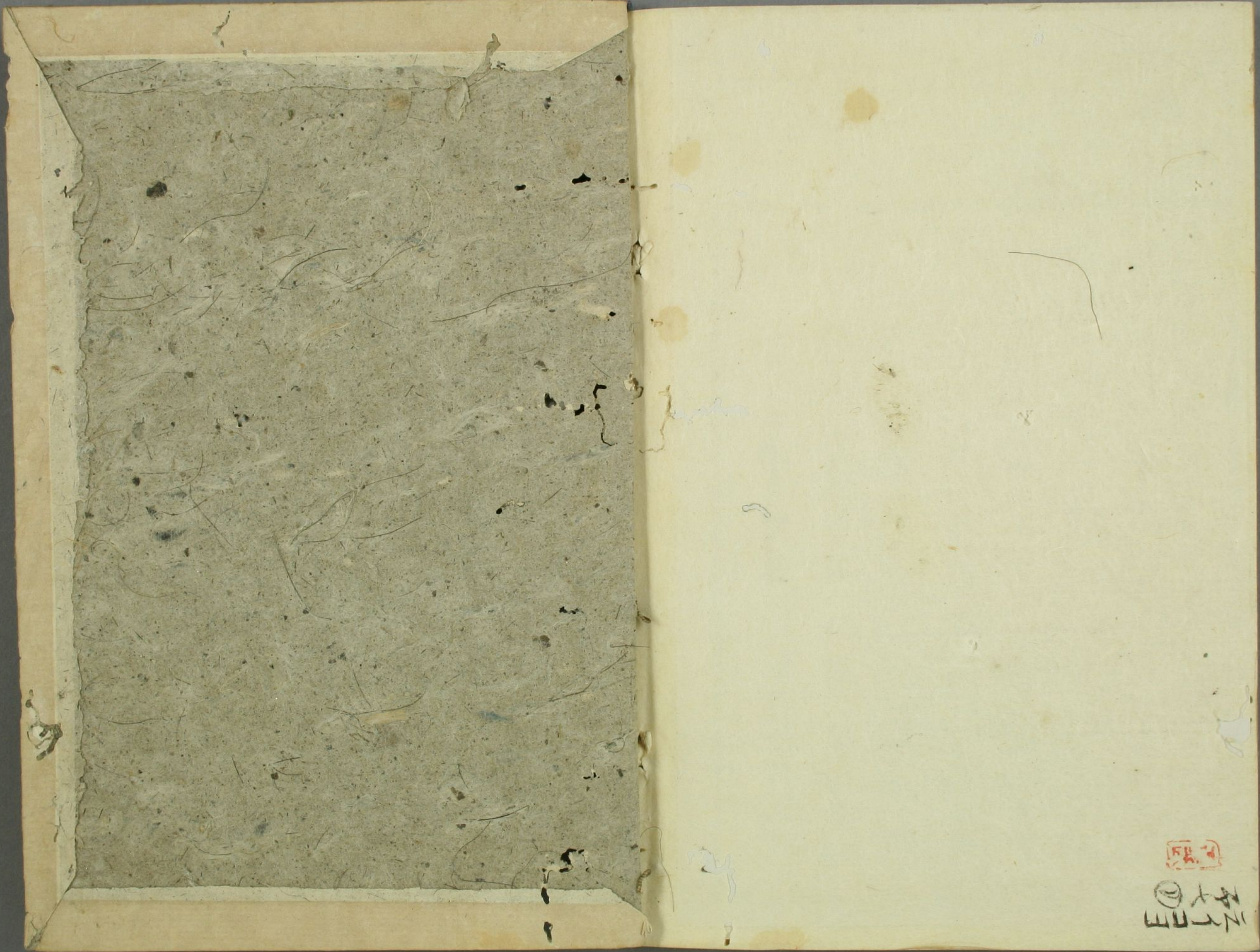
同 六角通柳馬場西町

平野屋茂兵衛

同 堀川通二条下町

越後屋治兵衛

林



紅印
辛卯年

